有朋自遠方来

秋に寄せて

暑い夏も去り、万物がほっと一息つくすがすがしい秋となりました。四季の花樹を揃えて有名なここ文華館の庭にも、紫と白の萩が咲き乱れ、葵や、芙蓉、木槿の季節が終ったことを告げています。秋蟬がしきりと泣き、秋虫が合唱し始め、トンボ達の飛び交う季節でもあります。

このように、自然の生物達が、各々その出番を受け持って入れ替り立ち替りその活躍の時を示す日本の四季。我々は不断、それをごく当り前のことと考えていますが、世界には四季のない国々も多く、そうした国に比べて日本では、四季の変化が人々の心に目に見えぬ多様な影響をもたらし、日本的情緒の形成にどれ程役立っているかは、推しはかるすべも知りません。

自然界は、実に多種の美しい花樹や生物を我々に恵み、自然界の中で唯一我々人類だけは、太古から、日々の営みの中に慣れ親しみ、心に映じた自然の景物を様々な形で記し留め、永遠に残し伝えることを知っていたのでした。自然の生命から得た刺激や活力を新たな創造のエネルギーに変えること——人間だけに可能な勝れた能力——によって残された作品のおかげで、我々は古代から変らぬ人間の自然への憧憬を偲ぶこと

籬菊文様蒔絵机(天板)

ができます。例えば、当館の蔵品の中に、その文様を特に秋に題材しているものを思い返して見ましても、伝趙令穣筆秋塘図、張風筆賞楓図、本阿弥光悦筆和歌色紙、乾山筆武蔵野墨田川図乱筥、などの絵画の他、焼物で柿右衛門作色絵菊花文八角瓶、尾形乾山作色絵竜田川文向付その他、そして、籬菊文様蒔絵机、秋草文様蒔絵隅赤手筥、尾花蝶文様蒔絵折文筥その他の漆工品、更に金工品など全部で四十点近く挙げられます。その中では菊の文様を筆頭とする草花文様が最も多く、稀にきりぎりす文様鎌倉彫香合など動物も登場します。

秋はふけ行き、自然界の実りの秋は、また、人間界の創造の季節でもあります。上記のような作品を蔵し、ご覧いたゞいている当館では、四季を問わず人々の心のオアシスであると同時に、人々に創造の刺激を与える小さな起爆剤の役目を果し得ればと不断から願っているのです。

(九月十五日記)

季刊 美のたより No.37
昭和51年10月15日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.